

# 横浜が「国際都市」となるために 中区中華街と鶴見区潮田

市内に居住する外国につながる市民の数が急速に増えている。1980年代中頃まで2万人前後だった市内の外国人登録者が現在は6万9508人(2006年1月末)となり、この20年間で3倍以上増えたことがわかる。実に市民の約50人に1人が外国籍を持っているのである。横浜を世界に開かれた国際都市にするというのであれば、まず私たちの隣人である外国につながる市民が、この街でこれまでどのように暮らしてきた、また、どのように暮らしたいかについて考えているのかを、まず知るところから始めるべきだろう。

## 異文化交流の街 横浜中華街

地域、職場、学校などで外国につながる市民とコミュニケーションがある日本人市民は意外に少ない。平成16年度の市民意識調査で「外国人との付き合いについて聞いたところ、「まったくない」49.4%、「身近にいるようだがよく知らない」17.4%で、両者の回答を合わせると、66.8%の(日本人)市民が日常生活で「外国人」とまったく接触していないし、また彼らがどのように暮らしているのかもよく知らないということになる。

その反面、「外国人」との付き合いを広げていきたいと考える市民も、54.2%と過半数を超えている。異文化交流に対する市民のニーズもまた高いのである。

ところで、横浜で、最もポピュラーな異文化に触れることのできる街といえば、やはり中華街であろう。

「朱色の光をさえぎるのは喧騒と雑踏と道々の蒸籠からたちこめる熱い蒸気。日本に居ながらにして異国へ旅に来ている自分を錯覚したくなる魅惑的な街。東南西北の牌樓に守られた空間の中で胃袋から生命力を満ちし幸福をチャージできるエネルギーが溢れる街。」

国際都市・横浜の代表的な観光スポット「横浜中華街」。横浜開港とともに歩んできた中華街は、2004年2月のみなとみらい線の開通や、10年越しの念願であった中華街大通り整備の完了、中華街コンシェルジュの創設などに代表されるように、絶えず変化しつづける全国各地から観光客を集めるまでに大きな発展を遂げた。

## 中華街 苦難の歴史

しかし、華やかなイメージで観光客を魅了する中華街もここまでの道のりは決して順風満帆ではなかった。関東大震災と第2次世界大戦の横浜大空襲で中華街

は2度も壊滅的に破壊され、そのつど中国人華僑は1からの街の再建・復興に全力を注いできたのだ。同時に地元商店街住民との交流も大切にしていた。特に第2次世界大戦時は、高まる反中感情の中で日本に残留した華僑・華人は山下町の戦死者追悼会に華僑・華人の代表を送るなど、地元との関係を維持する努力を続けながら耐えていった。

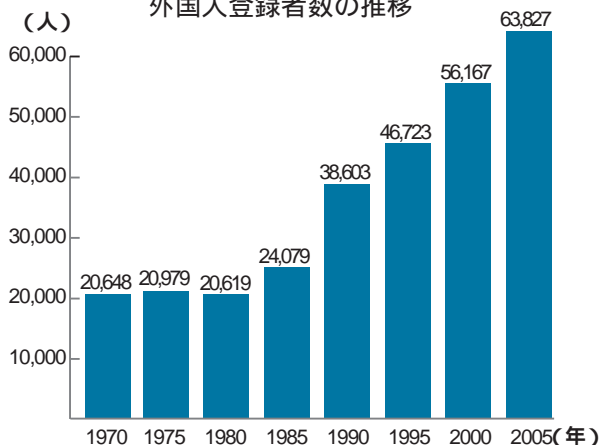
戦後、華僑の並みならぬ情熱により戦前のような活気を取り戻すまでになるが、近くに米軍施設があったことで中華街は外国人を対象としたバーや娯楽施設が増え、歓楽街の性格が色濃くなる。そんな中で1953年(昭和28年)、横浜市は、海外のチャイナタウンに負けないくらいに横浜中華街を名所にするという方針を打ち出す。そうして行政と中華街が協力し、復興した中華街のシンボルとして1955年に牌樓(1)「善隣門」が建築された。

観光地として中華街が転機を迎えるのは大阪万博の開催(1970年)と日中国交回復(1972年)によってである。内外からの観光客と日中友好ムードで中華街が全国的に脚光を浴びることになったのだ。これを機にさらに牌樓の増設、街の整備を行っていった。

しかし時同じくして歴史的問題を露端に華僑・華人の中で不協和音が生じてしまう。けれど中華街の発展という華僑・

華人共通の願いに、いくつかに分かれていた華僑・華人コミュニティは、お互いを尊重し、団結して火災に見舞われた関帝廟(2)を1990年に新しく完成させた。善隣門が復興のシンボルならば関帝廟は華僑団結のシンボルであろう。こうしてカナダ・バンクーバーのチャイナタウンと1995年に姉妹提携を結ぶまでに発展していったのである。現在、中華街を支えるのは日本で生まれ育った華僑・華人の2世・3世である。近年、春節・関羽祭など中国の祭事に基づき華やかなイベントが開催されているが、これは日本人への中国文化紹介とともに彼らのアイデンティティの再認識でもあるといえるだろう。

外国人登録者数の推移



鶴見区潮田地区 もつ1つの中華街を目指して

鶴見区には、「もつ1つの中華街」になるかも知れない可能性を秘めた異文化交流の街がある。

JR 鶴見駅から10分ほど歩くと「Barie」というブラジル料理のレストランがある。そこでカイヒリーニヤというブラジルの酒を注文すると、サトウキビからできた焼酎のようなものがテーブルに出される。アルコール度数はかなり高そうだが、しかし、甘い香りとライムの爽やかさにつられてすんなりと飲めてしまう。夜の時間帯には南米出身の客がほとんどを占めるそうだが、常連客が多いせいがか大きな笑い声やポルトガル語での楽しいな会話が絶えない。横浜市鶴見区・潮田地区を歩いてみると、他のエスニック・タウンとは違った印象を持つかもしれない。なぜならブラジルや南米の商店が昔ながらの商店街に溶け込みながら点在しているからだ。

現在、潮田地区には日系ブラジル人を筆頭に南米から移住した多くの日系人が住んでいる。2004年のデータによれば、横浜市に日系ブラジル人は約4000人、そのうち潮田地区におよそ1500人が住んでいる。鶴見区の外国人在住者数は中区に次いで第2位である。

なぜ日系ブラジル人たちは潮田地区へやってきたのか？それにはここに住んでいる地元の人々の出身地と関係がある。かつてこの地域は沖縄からの季節労働者が集まる「沖縄村」として知られていた。また、南米に移住した日本

人の多くが沖縄出身だったことから、親類縁者を頼ってこの地に集まるようになった。潮田地区にはもとより沖縄出身者のコミュニティがあり、現在も、沖縄出身という共通点を軸にブラジルから日本に戻ってきた同郷の人々を温かく受け入れ自立への生活支援を行っている。

日系ブラジル人三世の橋本氏が代表をつとめる在日ブラジル人企業家協会(ABC Jap. o)は6年前に設立された。橋本氏は、1963年生まれ。祖父から伝えられた忍術や居合いなどの武道を学ぶことを目的に1989年にブラジルから来日した。

「3Kの職にしか就けない日系人が、ブラジル料理店や食材店、マッサージなどの店舗を開業したり、自ら会社を起こそうという人のために、法律や言葉の面で支援したり、お互いに仲良くしていくための場をつくりたかった」(橋本氏)ことが設立の動機だという。在日ブラジル人企業家協会は、京浜急行線「鶴見駅」から2分ほどの場所に事務所を構え、日系ブラジル人への起業支援、フリーバー Made in Brazil の発行、ポルトガル語による地図の作成等、日系ブラジル人へ生活情報を提供している。今では1990年頃から来日した日系ブラジル人の若い世代の人たちが自らの自立に向けて、ブラジル料理レストラン、旅行代理店、中南米向け輸出入業、中南米の食材マーケットなどさまざまな分野で事業を行っている。

潮田地区はこういった若者たちが活躍できる場であると同時に、日頃ブラジルの文化に触れる機会の少ない私たちにとって魅力的な地域になりつつある。さらに、国際色豊かな新しい顔として、地元の商店街の活性化などにも寄与している。

在日ブラジル人企業家協会には、日系ブラジル人だけでなく多くの日本人がボランティアとして活動に携わっている。南米を旅してブラジルに魅せられ、在日ブラジル人企業家協会に参加している渡井さんもその一人だ。「日系ブラジル人を介して、

お互いの文化、習慣を理解して『外人・他人』ではなく、『友達・同僚』と呼べる関係を築きたい」という願いをこめて、彼の企画により協会事務所となり「Bar ABC Jap. o」が近々オープンするという。お酒とともに楽しいおしゃべりをしながらだれもが打ち解けられる、そんな雰囲気のおかげで、日系ブラジル人と日本人がともに酒をかわしながら盛り上がる日も近いことだろう。

さらに、2年後の2008年は、移民100周年。日系ブラジル人の来日が本格化してから20年の節目を迎える年だ。橋本さんは、2008年に向けて、さまざまな文化交流事業を企画している。

こうした試みが広がり、エスニック・タウンとしての「鶴見・潮田」の名が市内はもとより、全国に伝わることで、鶴見・潮田に全国から観光客が訪れる日も近い将来あるかもしれない。

白書では(日本人)市民と外国につながる市民がともに暮らすとはどういうことなのか、さらに深く考えるときも、横浜が「国際都市」となるために、私たちがなにをすれば良いのかということについても考えてみよう。

(1) 牌楼—中華街のシンボルとなっている装飾美鮮やかな屋根付きの門。風水思想を基に10基が建てられており、特に東南西北の4基は、街の繁栄と幸福を守っているといわれている。

(2) 関帝廟—三国志に登場する武将・関羽が祀られている。商売の神として華僑・華人の信仰が厚く世界各国の中華街に見られる。

(3) バル—英語のバーをポルトガル語読みしたもので、カウンター中心の軽食堂のようなもの。アルコールもあり、欠かせない社交の場でもある。

